

## 「命どう宝」——二十四万の命に推されて——

開邦高校 一年

石川 日向子

今から六十八年前、太平洋戦争が終わった。それはもう過去のことなのか。忘れていいことなのか。いや、それはちがう。二度と繰り返してはならない。絶対に忘れてはいけないことだと私は思う。

「おばあちゃん、この写真の人だれ？」 私は壁にかかった軍服を着た凛々しい男性を指差して尋ねた。

「この人はおばあちゃんのお兄さんだよ。戦争で亡くなったんだ。」 そう言って祖母は兄の写真を見つめた。昭和十九年。彼は防衛隊の後方支援として召集された。それまでは金武町で教師として教鞭をとっていた。彼は戦争に反対だったそう。今となっては、彼の口から真実を聞くことはできないが、彼は教師として子供達の未来を守りたかったのだと、私は思う。しかし、その理念は当時の大日本帝国憲法の下では「非国民」と呼ばれ、握りつぶされてしまうものだった。彼は自分の信念を曲げ、戦場へ向かうしかなかった。愛する子供達を置いて。昭和二十年、五月。彼は三十八歳で戦死した。

私は平和の礎へ、彼の名前を探しに行った。六月二十三日。暑い暑い夏の日だった。彼の名前を私は撫でた。そして誓った。二度とこのような悲惨な出来事を起こしてはならない。私達が伝えなければならぬ。絶対に、絶対に。辺りを見回せば、奪われた約二十万の命。この命にはどれだけの夢、可能性、笑顔、そして未来が詰まっていたのだろうか。生きてさえいたら、たくさんの喜びや幸せを手にしていた。それを戦争は奪ったのだ。その約二十万の命に見つめられた時、私は慄然としたのだ。

自分と同じ人間が戦闘爆撃機から鉄の雨を降らせた。自分と同じ人間が手榴弾を持ってせまられ、そして自決させられた。どれもこれも人間がしたこと。戦争は人間がするもの。人間が人間でなくなってしまう、それが戦争だ。

確かに戦争によって領土を得ることができるかもしれない。戦争によって資源を得ることができるかもしれない。戦争によってお金を得ることができるかもしれない。しかし、それらを得るまでには、たくさんの尊い命が犠牲となっている。声を大にして言いたい。この世に、ただ一つとして犠牲となってもいい命などない。誰一人として人の命を奪う権利を与えられた人間などいない。

希望に満ち溢れた人間から光を奪っていくのが戦争だ。

今、私達が生きていられるのはなぜか。何も恐れずに暮らしていけるのはなぜか。それは日本が今、平和だから。そして、六十八年前に犠牲となった人々の上に、今の平和があることを深く胸に刻みこまなければならぬ。

あの悲惨な出来事を「かわいそう」なままで終わらせてはいけない。目を背けてはいけない。ここからがスタートだ。犠牲になった人々へ祈りを捧げ、誓う。

「平和を私達の手で築き上げていく。」 犠牲になった命を明日の力に変えて。そして未来へつなげて。

今が幸せであるために。明日が幸せであるために。私達がすべきことは三つある。

一つ目は、まず過去を知ることだ。二度と繰り返さないために。ドイツのワイツェッカー前大統領の言葉がある。

「過去に目を閉ざす者は現在にも盲目になる」 歴史を学び、日々の出来事と照らし合わせ、何が正しいのかを判断していくことだと思う。

二つ目は、日々の暮らしに耳を傾け、世界で今何が起こっているのかを理解することだ。自国の現状。他国の現状。国と国の相互理解。平和への核となるものはまさに「相互理解」そして「信頼」であると私は考える。

三つ目は、「命どう宝」ということだ。この言葉は沖縄県民の平和に対する思いを象徴している。「命こそ宝。」それは、日本国内唯一の国土地上戦を経験した沖縄県民が、歴史に学んだ言葉だ。私達は生きる意味を持って生まれてきた。一人一人にしか出来ないことがあって生まれてきた。それぞれに夢があり、希望があり、明日がある。生きてこそ感じられる喜びや悲しみ、幸せや絶望。全て「生きてこそ」だ。自分の命を大切に。人の命を大切に。そう、生きていく限り、その生をまっとうし、生き抜く権利があるのだ。

私達は輝きに溢れた未来がある。可能性がある。その未来を握っているのは、私達一人一人。私達が守らなければならぬ。私達が伝えなければならぬ。愚かな戦争をなくすのは私達。平和を創るのは私達。

いつか、世界中が輝くたくさんの笑顔で溢れるように、私はここ沖縄に眠る二十万の命に見守られながら、平和を希求し、平和を築く努力をしていきたい。